

変身聖姫

# シルヴァハート

18  
未 満

挿絵／ヤサカニ・アン  
氷室凜子

家畜となった  
敗北ヒロイン

試し読み版

二次元ドリームノベルズ

プロローグ	シルヴィアハートの敗北	006
第一章	アヘ顔ダブルピースの誓い	022
第二章	搾乳家畜	078
第三章	家畜の縄張り争い	121
第四章	便女家畜	193
第五章	家畜の公開陵辱	232
終章	完全屈服家畜	275
外伝	家畜の敗北枕営業	317

## 登場人物紹介

Characters



ごえいじりおん  
**御影寺凛音**

ヒロイン省所属の変身ヒロイン。  
お嬢様育ちでプライドが人一倍高い。



ささべ  
**笹部**

ヒロイン省所属の四十過ぎの男。変身ヒロインと政府の連絡係。

「いつも生意気な乳を揺らして、家畜ごときが偉そうブヒ！」

「む、胸に触るのをやめなさい！　くうう！」

驚掴み。そう表現するのが相應しいだろう。

スイカのようにぷるんと育った両乳房は、笹部のいやらしい指が沈みこむ程に揉みしだかれる。

それにより、辺りに飛び散るは女のジューシーな香りだ。

Hカップ爆乳は、揉まれる程に形を変えては柔らかさをアピールし、どこまでも男を挑発する。

「ぶひひ、おっぱいを揉むのは楽しいブヒ。いい母乳が搾れそうブヒよ」

「く、人を乳牛みたいに……女性を何だと思ってるっしょるの!？」

「何って、女は家畜だと言ってるブヒよ？　性欲処理以外に使い道のない下等生物。それを飼育して畜産するのがそんなに不思議ブヒか？」

凜音の乳房を縦に横に揉みしだき。

女性の尊厳を貶めながら笹部は続ける。

「実際、おまえ達ヒロインは家畜にびったりブヒ。スタミナがあるから一晩中犯してもまだ使えるし、顔とスタイルがいいからペニスを勃<sup>た</sup>たせやすい。それに、ヒロインが産む子

供もヒロインとなる可能性が高いというデータもあるから、家畜として繁殖するのも容易たやすいブヒよ。ぶひひひ」

（な、なんて侮辱を……人権侵害にも程がありますわ！）

凜音が嘆く通り、笹部の発言はあまりにもヒロインの尊厳を穢すものだった。

まるで彼女らが飼育されるために生まれたかのような暴言の嵐。

女を辱める発言に、凜音は悔しさのあまり歯ぎしりする。

が、女の悔しがる表情など笹部にとって興奮剤以外の何物でもない。

笹部はさらに陵辱欲を剥き出しにする。

「ぶひひ。随分と生意気な顔だ。そんなメスにはもっと激しい検査をするブヒよ」

「はう!? な、何を——ああ！」

巨乳を堪能していた卑しい両手は、次なる性欲に従って移動する。

標的は、Hカップ巨乳の頂点にて自己主張する雌乳首だ。

ぴっちりとした女体を覆うレオタードを、それでもぶつくり浮かび上がらせる程の生意気な

雌突起。それをぎゅむとつねられ、凜音はびくんと身体を震わせる。

「ぶひひ！ 気持ちいいか。シルヴィアハートは雌乳首が弱点か！」

「い、痛いだけですわ！ やめなさい、それ以上は——」

「痛いだけ。その割には随分と硬くなってるブヒよ、この変態ヒロインめ」

「違、そんなんじゃ——あうう！」

笹部の言う通り、捏ねられ、引っ張られ、恥辱の限りを尽くされる上向き乳首は刺激に応じて硬度を増し、雌性器目掛けて快感をあますことなく放っていた。

凜音はそれを痛さから来るものと思いいこうとしているが、それは言いわけ。既にこの時、彼女の中で家畜の本能が目覚めつつあったのだろう。

当然、それを笹部は見逃さない。

「ぶひひ。やっぱり僕の見こんだ通り、おまえは立派な家畜になれそうだ。淫乱乳首は飼育される悦びを叫んでいるブヒよ。けどまだプライドが邪魔しているのかな？　だったらそのプライドを叩き壊してやるブヒ！」

「え——いやああ！」

雌乳と雌乳首をたっぷり楽しんだ笹部は、凜音の本性を暴きにかかる。

その方法は実に単純。

牛や豚を躡けるよう、彼女のわがままヒップを平手でめった打ちにするのだ。

「啼け啼け。二度と生意気な口がきけないよう身体に叩きこんでやるブヒ！」

「ああ！　待——いやああ！　あひひ！　ひあっ！」

——びしっ！ パチン！

「ぶひひ、いい声で啼き始めたな。舐けられるのは気持ちいいか、この雌家畜！」

「ちが、そんなんじゃ——ひぐう！ あひひい!!」

——はしっ！ ぴしいん！

ぷりんと突き出たフルーティな雌尻を中心に、笹部は凜音の淫乱下半身をべちんばちんと性欲たつぷりに叩き続ける。

ハリのある十代ヒップに、ぱつぱつの十代ふともも。女の肌に触れることが嬉しくてたまらない笹部は、満面の笑みでそれらを<sup>なぶ</sup>廻り性欲を満たしてゆく。

まさに、間拔けな家畜が人間に舐けられている光景だった。

「ああ気持ちいい。メスの身体に密着して乳も尻も触り放題。女はホントちんぽを悦ばせるのに便利な家畜ブヒ。ぶひひ！」

「あひい！ うぐう、おほお！」

べちんばちんべちんばちん!!

実に十分以上にもおよぶ尻ビンタは、凜音の家畜本能をさらに刺激し、ペニスに心地よい啼き声を上げさせた。

気付けばボリューミーな雌尻は無様に腫れ、<sup>しつけ</sup>舐めの惨めさを演出。

気高いはずの顔は「おほ！ あひ！」と喘ぎ声を漏らすことで、家畜快楽に染まっていた。

雌乳首はさらに硬く自己主張して、コスチューム越しに卑しさを表す。

心では否定するも、身体が家畜として目覚めてゆく。

（そんなはずはありませんわ！ わたくしが家畜になりたいだなんて！）

しかし、プライドの高い凜音は心の中で必死に否定した。

自分は家畜ではないと。女は気高い生き物だと。

ゆえに、少しだけ変な声を漏らしてしまっただけ、これは痛さゆえのものであり、セーフであると。彼女は必死にそう言い聞かせたのだ。

中々に往生際の悪い家畜だった。

「さて。もっと躡けたいブヒが、そろそろ時間ブヒ。最後の仕上げをするブヒよ」

「し、仕上げ？」

そんな生意気家畜を相手に、笹部も次なる調教が必要と考えたのか。スパンキングの手を止め、凜音を吊るすロープをほどこいたのだ。

思いがけず解放された凜音はたすかったと思うも、その希望はすぐに潰える。

笹部は家畜に立場を理解させるべく、屈辱の調教を行うのだ。





「それでは凜音ちゃん。今からキミには仕上げの躰として、全裸土下座をしてもらうブヒ。家畜らしくご主人様に飼育を懇願するブヒよ」

「はあ!? どうしてわたくしがそんなことを!？」

予想だにしない台詞に当然凜音は抵抗する。

だけど笹部の飢えた笑みは消えない。

「簡単な話なんだな。家畜は牧場入りする前に、入荷前検品を行う。今からおまえを含めた今期入荷分の家畜にそれを実施するブヒが、その際に他の職員にも協力してもらうブヒ。その時にキミが失礼な態度をとると、僕の立場がないブヒよ。だからここで『家畜は飼育者より下』と自覚させるブヒ」

「そ、そんな、わたくしが土下座なんて」

「嫌ならべつにいいブヒよ。ただしその場合、おまえの弱点をネットにバラ撒いてやるんだな。妹の名前に写真、使用済みにされた過去も全部ブヒ」

「そんな！」

さらに笹部は続けて語る。

自分はヒロイン省の中で、ヒロインの個人情報管理を担当していること。全てのヒロインの情報を暗記していること。つまり、全てのヒロインを自由自在に脅迫出来ることをア

ピールした。

凜音は絶句せざるを得なかった。

（そんなことをされたら、あの子は生きていけませんわ！）

ただでさえ塞ぎこんでいる妹の秘密が晒されれば、彼女がその後どうなるかは明らかだ。それだけは絶対に防がなくては。

「ほら凜音ちゃん。早く裸になるんだな。その首輪はヒロインの力は封じるが、コスチュームだけは自在に発現したり消したり出来るようになっていく。家畜に服は不要。おまえはただのかーちーく。男に負けて、飼育されるだけの惨めで無様な生き物。ブヒ」

「くう……！」

はやし立てる笹部の前に、凜音のプライドはズタズタだった。

高貴に育ち、気高いヒロインとして生きてきた自分がこんな目に遭うなんて。

女としての尊厳が精液をかけられたも同然の穢され具合だ。

でも、もう彼女に抵抗する道などあるはずもなく。

「お、やっと大人しくなったブヒね。家畜の頭でも状況を理解出来たブヒか？」

「ぐうう」

歯を食いしばり、涙を堪え。臭いちんぽを擦りつければ極上の快楽を約束してくれそう

な屈辱顔で、凜音は言われた通り変身ヒロイン姿を解除する。

白い肌が、桃色の突起が、淡く火照る性器が、光と共に次々と露わになる。豊満で芳醇な雌身体が晒される。その女体からは、強姦欲をそそる魅惑の香りが放たれていた。

「ぶひひ！ 脱いだ脱いだ。家畜の凜音ちゃんが裸になったブヒ！ やっぱりおまえは無様な家畜。裸で飼育されるのがお似合いブヒ」

「ふぐう……くうう……っ！」

侮辱し続ける笹部を前に、凜音は呻き声を漏らすしかない。

たふんたふんのHカップ爆乳に、硬く上を向いた恥知らず乳首。

舐め回せば至極の快感を得られそうな艶肌に、腫れあがった無様な雌尻。

形よく生える陰毛からはいやらしい匂いが放たれ、その下では桜色の雌性器がひくひく蠢<sup>うごめ</sup>いている。ブーツとグローブをあえて残した、扇情的な姿。まさに強姦されるために生まれた魅惑の極上女体。それら全てを視姦され、そのうえ土下座までしなくてはならないのだから。

膝をつき、手をつき、裸の少女は最大の優越感を笹部に提供する。

屈辱に震える声と共に。

「ど、どうかわたくしを飼育してくださいませ……お、お願いします」

（屈辱ですわ……わたくしがこんな台詞を言うなんて！）

まさにそれは敗北の瞬間。

男を憎む凜音にとって、その台詞は精神的敗北を意味するものだった。

全身を震わせ、目をつむり、凜音は必死に唇を噛みしめる。

だけど、笹部はそれでも満足しないのだから無情である。

「ううん。悪くないんだけど、いまい家畜の自覚を感じられないブヒね。僕のペニスが悦んでいない。もっと家畜の気持ちになってくれないと」

「そ、そんな!？」

ニヤニヤ嗤いながら放たれる挑発に、凜音は絶望していた。

ただでさえ屈辱だった全裸土下座。なのに、やり直しを要求されるとは。どこまでも女を弄ぶ<sup>もてあそ</sup>笹部に、凜音の悔しさは留まるところを知らなかった。

（調子に乗って！ でも従わなければ妹は——）

逆らう真似など出来るはずもない。

全ては妹を守るため。凜音は怒りを飲みこみ、再度地面に這いつくばる。

「ど、どうか笹部様……家畜のわたくしを男性様の手で飼育してください。よろしく願います」

「そうだな。搾乳するにはもっと精液を中出ししなきゃいけないからな」

「え——えええ!!」

（今のが準備運動ですって!!）

男の言葉に凜音は衝撃を隠せなかった。

準備運動。今のが準備運動。

凜音はあらためて驚愕するが、しかし男の言うことが正しいのである。

これらはそもそも搾乳するための手段でしかなく、未だ母乳が出ないということは、もっとも本格的な種付け交尾が必要ということなのだから。

「よおし、じゃあ次は俺の番だ！ たっぷり種付けするぜえ！」

「いやあ！ も、もうやめてくださいませ！」

「家畜が何抵抗してんだ。勝手に人間語を喋ってんじゃねえよ！」

「どうか——ふぐ……むぐぐ……ッ」

（い、息が……苦しい……っ！）

家畜の分際で抵抗した罰といったところか。

逃げようとした凜音の口に、無理矢理に男根がぶちこまれる。

「おう、いいぜえ。家畜の喉も中々だな」

「ふぐう……ふぐうう……っ！ おごほ、えほ！」

二十センチ超えの凶悪ペニスが凜音の喉を完全密封。

臭い匂いを撒き散らし、陰毛がちくちくと美しい顔に突き刺さる。

当然口内ではカウパーや恥垢が喉奥へと流れこみ、凜音を屈辱へと突き落とす。

家畜は男性器以下の生命と示す美しい光景であった。

「さて種付け種付け。家畜の権利なんて完全無視。レイプなんて男が楽しければそれでよし」

四つん這いの凜音の背後からは、当然のように強姦ペニスが迫り来る。

家畜の人権なんて一切無視。

楽しい性行為を求めて、いよいよ二本目の男根が凜音を貫く。

「それじゃあ種付け開始するか。せーの、ふんんッ！」

「ふぶううッ！ ふぐふぶううッツ♥♥」

「ああ、これは良質なメス孔だな。種付けし甲斐があるぜ。ふん、ふん！」

「うぶうう……んむちゅ……じゅぷふうう！」

——ずぶずぶぶぶ！

雌膣に何の躊躇いもなく挿入される豪傑肉棒は、遠慮のない乱暴ピストンで凜音を辱め

る。それに対し、二度目ゆえだろうか。凜音はすぐに快感の声を上げ、ペニスを咥えたままよがるのだ。

（そんな……っ！ わたくしが、こんな前後から……っ）

四つん這いの前から後ろからも凜音の扇情的な肉体をペニスが貫く。

その衝撃はあまりにも激しく、まるでオナホールになった気分だった。

口内に広がる恥垢の味、陰毛より漂う悪臭、男根に犯される屈辱の感触。

それら全てが合わさり、凜音の身体はいよいよ自制出来なくなる。

「じゅぷふう ♥ んむちゅ、おごほ、おほ、おほ ♥」

「嬉しそうにアへってるぜ。やはり女は性道具だな」

（うう……どうして快感が止まらないんですの!!）

頭では耐え難い怒りと屈辱を感じているのに、しかしアへ顔は止まらない。

顔は無意識に白目を剥き、雌孔を突かれる度にアへった声を漏らしてしまう。

ペニスと快楽に狂う敗北姿は、気高さも何も感じさせない性欲まみれのもの。まさに性

に飢えた惨めな家畜がそこにいた。

それらを見た男達は、またも悪意たつぷりに解釈する。

「おいおい、随分嬉しそうなアへ顔だな。そんなにちんぽが好きなのか？」



「んびゅちゅ……ふぐ、おごほ、ちゅば……ちゅぷ」

「そうかそうか。じゃあもつと臭いちんぽをくれてやるよ。たっぷりしやぶれヤリマン！」

「あひ、あひあひ、んむちゅ……あひひいいい♥」

（い、いやああ！　こんなにたくさん臭いものが！）

待ちきれない二十八人の男達が一斉に襲いかかる。

バキバキに勃起した強欲ペニス。

力強くそびえ立ち、恥垢をたっぷり纏い、裏筋から悪臭を漂わせる中年ペニス。

それらが一斉に、凜音の肌という肌に擦りつけられるのである。

「ああ気持ちいい。メスにちんぽ擦りつけるのって最高だな」

「あひっ！　んむうう……っ！　ちゅば……ちゅ……あひいいい！」

（ふぎい……ふぎいいいいい！）

雌脰を男根で貫き、喉奥も男根で蹂躪し。

さらに両手にも男根を握らせ、まぶた瞼や頬にも男根をたっぷり擦りつける。

そのうえ背中、お尻、脚などにも存分に押しあてた拳句、豊満な雌乳にも男根を味わわせる。誇り高き正義のコスチュームが、ちんぽの匂いに染まってゆく。カウパーがじわりとにじみ、血と汗と努力の染みこんだスーツは、カウパーと性欲の染みこんだ臭い衣装へ

と変わってゆく。さらにそのうえ長い髪にも男根を巻きつけられ、気付けば凜音の全てが男根まみれ。

まさにちんぽ地獄がそこにあつた。

「んむうう……んぶびゅちゅ……ごふつ、ち、ちんちんをこんにゃにも……うくうう……ちゅぴ、んふぽおお♥」

（こ、こんな……わたくしは、選ばれし正義の存在、なのに……）

ちんぽまみれの状況で、凜音は歯噛みする。

だけど、頭が正常に動かない。

無数のちんぽの匂いにより、脳は蕩け、快楽が悔しさを凌駕してゆく。

そのうえ、飼い主様は陵辱をやめない。

それどころか、再び至高の時が訪れる。

「ああ、そろそろイクぜえ……」

「あ、あ、あへへえ♥」

膣と口を蹂躪する男根が痙攣する。射精の時が近付いてきたのだ。

尻を、頭を、それぞれ掴み、男達は最後のピストンを開始する。

「おお、おお、おおおお！」

「あひ、あへ、あへえええ♥」

突く突く突く突く突く突く。

「射精すぞ！ 射精すぞ！ んああああ!!」

「あひいいいいいい♥」

——どびゅるびゅるびゅびゅりゅりゅるびゅるるっ！

——びじゅるじゅるぶちゅりゅりゅるびゅるるっ！

「おおう……家畜に中出し射精え」

「あひ……ねちよ……んぶちゅりゅ……いひいい♥」

（うぐうう……っ！ またしてもわたくしの中に汚いものがあ）

雌膣と口内に、それぞれ臭い白濁雄精液がたっぷり放出される。

その量は尋常ではなく、一瞬で膣内や口内をいっぱい満たし、残りを外に溢れさせる程。生温かい精液の感触に、凜音の怒りはいよいよ頂点となる。

「アヘエ……こ、こんなに、こんなにたくさんの精液が……ぬめぬめで……んびちや……

ねばねばで……ごぼ、アヘエ……♥」

「うわ、何だこいつ。精液出されて悦んでやがるぜ」

「さすが家畜。女つてのは下品で劣等な生き物だな」

「あへ……んむちゃ……むちゅ……お、おえええ」

（くう……違いますのに。悦んでないませんのに！）

アへ顔となり、微笑みを浮かべ、家畜語ですらない呻きを漏らす。その口と雌孔からは精液がだらしなく零れており、とても生臭い。下品を極めた情けない姿だった。

そして同時に、男達はあることに気付く。

「おい見ろよ！ この家畜、母乳出してやがるぜ」

「おお、やつと出たか。ちんぽまみれになった甲斐があつたなあ」

（そんな……ぼ、母乳がわたくしの身体から）

精液をたっぷり出されたことで、凜音の身体はようやく妊娠したと勘違いしたようだ。さくらんぼ大に膨れ上がった淫乱乳首。

その先端からは、ついに乳白色の液体がちよろちよろと零れ始めたのである。

「うーし、じゃあ早速試しに搾ってみるか」

というわけで、言うが早いかな男達は準備を始める。

よがる凜音を気遣いもせず、四つん這いの乳の下にバケツを置く。これにて準備は完了。あとは女の胸に触れる悦びと共に、ぶるんぶるんと揺れる、男の性欲を世界中より集めて詰めこんだような情欲雌乳を、性欲のままに揉み尽くすのだ。

「あひ、あひいいいいッ!!」

「ぎゃははは！ 搾れた搾れた。家畜ミルクが大量噴射だぜ！」

（ひいい！ わ、わたくしのおっぱいからミルクが——！）

脳内で凍音は叫ぶも、いやらしいミルクは止まらない。

柔らかさを極めた極上のHカップ爆乳から噴射されるそれは、紛れもない母乳だった。

まだ十代の少女から甘い香りのミルクが乳首を伝って流れ出る。

その光景に興奮を抱く男達は、思い思いに熱きイチモツを勃起させ、さらに性欲任せに揉みしだく。

「げはは！ 変身ヒロインの乳搾りだぜ！ おらおら、もつと出せよ！」

「ひ、ひぎいい、でちゃう！ い、いやらしいミルクがでちゃううう！」

「この家畜、乳搾りで感じてやがる。ほんと淫乱な家畜だぜ！」

「あひいいいい♥ おっぱいが……メスのみりゅくが……で、でちゃうう」

（くうう……か、からだか、言うことを聞きませんわあ……）

敏感になった女体は今や搾られるだけでも感じてしまい、母乳と共に淫靡な声まで漏れ出る始末。それを男達は面白がり、さらに力強くメスの乳を揉みしだく。

女として、女の象徴である胸を好き放題に触られるのが悔しすぎる。ましてや女を家畜

扱いする強姦魔達であれば尚更だ。

だけど抵抗する気力は既になく、さらなる絶望が家畜を襲う。

「うし。じゃあ搾乳チェックも済んだし、強姦の続きをするか」

「ふ、ふひ!」

「だな。もつと搾るためには、もつともつと精液を中出しする必要があるもんな」

「そ、そんな……こ、これ以上の辱めなんて」

まだ射精を楽しんでいない二十七名の男達。精液をどっぷり蓄えた睪丸を揺らす彼らの会話に、凜音は呆然とするしかなかった。  
ぼうぜん

処女喪失。中出し交尾。

全身ペニスまみれ。メス乳の搾乳。

既に一生分の屈辱を受けたというのに、まだ強姦ペニスは二十七本も残っているのだ。

臭いちんぽがぐるりと囲み、今か今かと陵辱の瞬間を待つその光景は、凜音にただただ

絶望を突きつけていた。

（これが姦獄牧場……こんな中でどうやって生きていけば）

この牧場にて畜産品となる恐ろしさ。

それが、ようやく実感を伴い凜音の未来を覆い尽くす。



「で、では、どうすればいいのですか？」

「そうブヒねえ」

思わぬ事態に焦ったのだろう。

うってかわって余裕を失くした凜音は不安そうに訊ねる。

それに対し笹部はうんうん唸り、そして何か思いついたのかニカッと笑いを開く。

……嫌な予感がする。

そんな凜音の直感はまだ的中する。

笹部の笑みより紡がれた台詞は、とんでもないものだった。

「じゃあ凜音ちゃん。ここは羞恥心や屈辱をさらに倍増させるため、アへ顔をしながら放尿するのはどうブヒか？」

「ほ、放尿!!」

「そうブヒよ。アへ顔ダブルピースで挨拶しながら、小便をぶちまけるブヒ」

「はあああ!？」

凜音は叫ぶ。ただでさえ屈辱のアへ顔に加え、放尿シーンまで披露だなんて。プライドの高い凜音には出来るはずもない行為だったのだ。

「嫌ブヒか。べつにいいブヒよ。CMの内容はおまえ達の自由なんだな。そのかわりSラ



ンクは遠ざかるんだな。ぶひひひ！」

「くうう……っ！」

笹部の嘲笑に、凜音は唸るしかない。

最悪だ。これまでの経験から、すんなりいくとは思っていなかったが、まさかこんな展開になるなんて。あらためて目の前の男に憎しみをぶつけていた。

しかし、そうしたところで救われる道があるはずもなく。

「や、やり、ますわ」

「ぶひひ！ さすが家畜！ プライドのない奴ブヒねえ」

「そんなに自分だけSランクになりてえのかよ。自己中なメスガキめ」

（くううう……！ またわたくしを侮辱して！）

降り注ぐ侮蔑の嵐に、凜音は顔をしかめるしかない。

家畜の分際で使っていたく意識が欠けていたのだから、飼育上こうした教育を受けるのは仕方のないことなのだが。しかし自らを偉いと勘違いしている凜音にとって、この上ない屈辱だったのだろう。その顔は、いよいよ怒りで赤く染まっていた。

「この葉を飲むブヒよ。排尿促進葉ブヒ。こいつを飲めば一発で大量放尿出来るブヒ」

「く……っ！」

だけど悔しがったところで、男にとってはペニスを悦ばせる以外の何物でもなく。  
結局、凜音は錠剤を飲み、プライドを捨て去るのだ。

「あ……あひひいゝゝ♥ メス家畜のシルヴィアハートですうゝゝ♥ あへあへえ♥ 今  
日はたっぷりわたくひの無様な家畜ライフを紹介ひまふので、どうぞシルヴィアミルクを  
買ってくださいいまへゝ♥ よろしくお願いひま……んほおおお♥ あひひいひいひい  
♥」

じよろじよろじよろろろ。

「ぎやははは！ アへ顔ダブルピースで小便してやがるぜあの家畜！」  
（よくもこんな辱めを……よくも！）

白目を剥き、舌を出し、だらしなくよがるアへ顔。それをさらに無様に彩るは、レオタ  
ードの下より漏れ出る黄金水だ。

薬の力で一気に放たれるそれは、色、量、音、共に家畜の無様さを見事に演出。同時に、  
十代少女である凜音に対して「人前で放尿した」という圧倒的恥辱をもたらした。怒りに  
染まるその顔は、臭いちゃんぽを擦りつけたくなる歪み具合であった。

一方で、薬に媚薬成分が含まれていたことや、ここ数日ファントムの精液を飲み続けた  
ことも影響しているのだろう。

凜音は恥辱の放尿にも確かな快感を見出してしまった。

「あひひひい♥ ど、どうか、わたくひのみるくを買ってください——ん、んほおお♥ で、でるう……おしっこ、でちゃう♥」

じよろろろ……じよろろろろろろ。

黄金水が、メスの股間より漏れ、周囲に広がってゆく。

「んひひひい♥ おほ♥ おほおおお♥ おひっこ、とまらない」

じよぼぼぼぼぼぼぼぼ……。

「ぎやはは！ さすが家畜！ どこでもションベンしやがるぜ！」

（調子に乗って……自分達が要求したくせに！）

悔しがるも快感は止まらず排尿も止まらず。結局凜音は、そのまま一分以上にもおよぶ放尿アへ顔を披露し続けた。

それにより、排尿し終える頃にはあたりはびちよびちよ。自身の周りには黄金の尿溜まりが広がっている。無様な姿を男に嗤われ、同期の家畜達にも蔑まれる。

「何あの姿。プライドはないの？」

「ほんと最低。一瞬でも信じた私がバカだった」

「クズ。女の恥さらし。ホント死んで」

「こっちまで匂ってくるのよ！ ションベンアへ女！」

所詮は家畜。

凜音の事情など知らない他の家畜は嫉妬し、悪態を募らせる。

一方、それらを見つめる男達は、いがみ合うメスの無様さに程よくペニスを勃起させていた。やはりペニスはメスを正しく貶めてこそ悦ぶのだろう。

「中々よかったブヒよ。じゃあこの調子で残りの撮影も頑張るブヒよ。ぺっ」

「あ、アヘアヘ……ありがとうございまふ……アヘアヘ……♥」

笹部は、仕上げとばかりに凜音のむちむちボディへねぎらいの唾を吐きかけた。

あまりにもむごい仕打ち。凜音はその行為に激昂しそうになる。

だけどそれでも彼女はぐつと堪え、必死に自分を鼓舞し続けた。

（よくもわたくしにこんな恥を……っ！ でも、全てはSランクのため。なんとしても任務を果たしてみせますわ！）

尿を撒き散らし、アへ顔で笑い、唾を浴びせられ。

それでもSランクのために、彼女は恥を晒すのだ。

この撮影が、まだまだ序の口にすぎないとも知らず。

※

それから、笹部に言われるままのハードな撮影は続いた。

「とりあえず雌舎における一日を撮るブヒよ。そこから使える映像を繋げていくから、是非とも最高のアへ顔で臨んで欲しいブヒ」

笹部監督のもと、まず撮られたのは家畜の食事シーンだった。

「んほおおおお♥ おいひいいいゝ精液入りの残飯とつてもおいひいでふううう。あひあ

ひあへあへあへエゝゝゝ♥」

「ぎやはは！ アへ顔で精液食ってやがる！」

「うわあ……これは酷い。こんな劣等女が正義面してたなんてドン引きだな」  
(うるさいですわ！ 演技に決まっているでしょう！)

四つん這いアへ顔にて、精液残飯を食りながら凜音は愚痴る。

現在、CM撮影はAランクメイン雌舎——他の雌家畜や男性スタッフが見ている前で行われていた。

アへ顔CMだけでも十分な屈辱なのに、それをより多くの人に見せつける。家畜の嫌がることを的確におさえる笹部のやり口に、彼女の怒りは限界間近だった。

しかもさらに、屈辱は上乗せされるのだからたまらない。

「おら、そんなおまえには特別なエサを用意したぜ。悦んで食れよ」

「う……っ！」

目の前に置かれたそれに、凜音は顔をしかめる。

なんとそれは、犬用トレーになみなみと注がれた精液オニリーのエサだった。

カウパー混じりのそれは粘つく、精子の塊がたっぷり注がれている。無数に浮かぶ陰毛や恥垢のせいで嫌悪感は一層に倍増。これを食せと男は言うのだ。

（くうう……こんな汚いものを食べるだなんて！）

凜音は生臭さに顔を歪めてしまう。今まで精液は何度も食してきたが、あくまでそれは残飯のおまけ。素早く飲みこむことでなんとか堪えることが出来た。

しかし今日の前にあるこれは、混じりつけなしのただの精液。

さすがの凜音も、大いに躊躇ってしまっている。

（でも、これを食べなければわたくしは……っ！）

そう、逃げられないことは本人が一番理解していた。

ニヤニヤと嗤う男達を見渡し、何かをあきらめた彼女はついに精液スープに突入する。もちろん、最高のアへ顔を携えてだ。

「あ……あひあひいいい……♡　じゅるるりゅー！　びじゅりゅるる！　精液スープとおつてもおいひいでふう……♡　あへアへえ……♡　トッピングのチンカスもちろん毛もいっぱ



いで嬉ひい♡　じゆるぶじゆるじゆる……にちゃにちゃ……じゆる……ぬちゃ……ごつくん——んほおおお♡　濃厚ザーメンこくまろおいひい♡♡」

「ぶひゃひゃひゃ！　マジで食いやがった！　女はプライドのない下等生物だな！」  
（くうう……臭すぎますわ！　こんな不潔なものを食べるなんて！）

犬のような四つん這いをして、精液トレーにアへ顔を埋め、精液をすすり、にちゃねちやと咀嚼し、飲みこむ。一体今の自分はどれ程惨めで情けないのだろうか。凜音の精神はいよいよ崩壊間近だ。

だけど、ここで逃げてしまえばSランクは遠ざかり、家畜の日々が続いてしまう。

ゆえに凜音はぐつと堪え、嬉しそうなアへ顔にて精液をすする。まさにプライドのない惨めな家畜に相応しい姿と言えるだろう。

そんな振る舞いは男達をさらにヒートアップさせる。

「おら、おかわりの精液を射精してやるよ。ちゃんと全部飲み干せ」

どびゅっ！　どびゆるびゆるびゅぶびゅびゅ！！

「ちん毛もたっぷりサービスしまちゅからね」

びゆるびゆるる！　ぶびゅびゆるりゆるりゅびゅびゅ！！

「もっと勢いよく食れよ。ちまちますすってんじゃねえ。家畜ごときに男性様の精液をく



れてやってんだぞ？　ありがたくすすれよ」

「くうう……ぴちゃ……じゅるる、じゅる、じゅりゅりゅ」

メスを好き放題にいたぶつても構わない。そんな状況が、男達の性欲を加速させたのは当然のことだ。

「精液……く、臭い……でも舐めなきゃ……れろれろ……ぶちゅ……じゅりゅる……ぺちやぺちや……ごくん」

ある男は勃起。ペニスをしごき、そのままトレーに濃厚白濁液を射精して。

また、それを見た別の男もトレー内に唾を吐き、陰毛を引き抜き、射精と共に精液汁の上にはばらばらと降りかけて。

さらに別の男に至っては、凜音の後頭部を踏みつけトレー内に沈めさせ、彼女の顔面を精液まみれにするのである。

「ごふっ!?　おふ!!　く、くうう……せ、せいえきが、顔中に……くうう!　ぺちや……じゅるるりゅ……ご、ごくん——」

止まらない男達の陵辱欲に、凜音は正気を失う寸前だった。

(いやああ!　臭い精液がこんなに!)

でも、それでも逆らうことは許されず。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【偶数月】  
隔月発売  
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】  
隔月発売  
1・3・5・7・9・11月

【電子版】  
毎月配信  
書籍版は奇数月  
発売!



2次元  
**ドリーム  
マガジン**  
2D DREAM MAGAZINE

COMIC  
**UNREAL**  
アンリアル

**敗北乙女  
エクスタシー**  
Defeat Maiden Extra

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌  
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も  
好評発売中

KTC 編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! **キルタイムコミュニケーション**

検索

二次元ドリームノベルズ

金肉英雄  
タイタス

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル！

小説家になるこの男性向けサイト  
「アクトアインノベルズ」  
から書籍化！

姫騎士 クラッシュ！

戦うヒロインを屈服させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル！



女刑事美優  
脱獄は自らの身体で

リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ？

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の  
外伝作品もあり！  
電子書籍で読める電子ノベル

フリーダム120%!?  
ジャンルにとわれない  
ドキドキラブ！

タイタス  
金肉英雄

二次元ぷち文庫



夢世界  
ドキドキ  
ラブ

ドキドキラブな  
ハーレム系  
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫